

兵庫教育大学言語表現学会

2023 年度研究発表会・第 43 回総会

プログラム・要旨集

期日：2023 年 11 月 26 日(日)

会場：兵庫教育大学 共通講義棟

兵庫教育大学言語表現学会 2023 年度研究発表会・第 43 回総会

参加費：無料

会 場：兵庫教育大学 共通講義棟

主 催：兵庫教育大学言語表現学会 (<http://gengo-hyogen.org/wp/>)

後 援：兵庫教育大学

○受付(9:30～) 共通講義棟 1 階ロビー

○研究発表(午前の部 10:00～11:45、午後の部 12:30～14:15) [1件につき、研究発表 25 分、質疑応答 10 分]

第 1 会場 共通講義棟 102 教室

1	10:00-10:35		
2	10:35-11:10	青木友彦	言語感覚を働かせ、言語表現の効果を捉える説明的文章の学習
3	11:10-11:45	嶋慎司	論理的読解力を育成する宣言的説明文の方略指導の開発—「確認読み」と「批判的読み」の関連性に着目して—
	11:45-12:30		昼食休憩
4	12:30-13:05	新川梨奈	文章論に基づく文学教材の授業づくり—芥川龍之介『トロッコ』の場合—
5	13:05-13:40	曹若蕎	日本語発音指導における「相互評価」に関する分析
6	13:40-14:15	LI ZIXUAN	第二言語学習者を対象とした日本語学習の研究—アニメ「ちべたぐらし・あひるの生活」の活用を中心に—

第 2 会場 共通講義棟 104 教室

1	10:00-10:35		
2	10:35-11:10	大浦正子	話型を中心とするメタ言語の活用に関する学習プログラムの構築
3	11:10-11:45	鶴谷拓真	音声入力アプリを活用した「書くこと」の実践研究—意見文執筆指導を題材として—
	11:45-12:30		昼食休憩
4	12:30-13:05	藤井雅	中学校国語科における「読むこと」の可能性—視覚情報の言語化に焦点を当てた学習指導—
5	13:05-13:40	金川麻奈未	伝記教材から読み解く小学校国語教科書の歴史的背景の一考察—福沢諭吉・田中正造を手がかりとして—
6	13:40-14:15	鹿内恵美	小集団で探究的に話し合う力を育てる学習指導の検討

第 3 会場 共通講義棟 106 教室

1	10:00-10:35		
2	10:35-11:10	宮本竜成	「ボーカロイド曲」を用いた漢字・語彙指導—興味関心に着目した授業に関する一考察—

3	11:10-11:45	篠倉利典	高等学校国語科における思考ツールによる論理的思考の支援に関する事例研究
	11:45-12:30		昼食休憩
4	12:30-13:05	尼子泰裕	語り手に着目して〈再読〉することで、児童の読みを再構築する授業実践の可能性—小学校高学年の文学作品を中心に—
5	13:05-13:40	日置志歩美	古典文学研究と古典教育を架橋するための授業実践を考える—中学校3年生の和歌教材「玉の緒よ」歌を中心に—
6	13:40-14:15	西村樹	『大鏡』における歴史的敗者の語られ方—伊周を対象に—

第4会場 共通講義棟 108 教室

1	10:00-10:35	藤岡里英	英語の歌を活用した英語発音指導—リズムに焦点をあてて—
2	10:35-11:10	上村こずえ	外国語学習において児童の動機づけを高めることを目指した協同学習の実践研究
3	11:10-11:45	藤田理瑚	中学1年生を対象とした明示的な読み書き指導の研究—デコーディング・スキルの獲得のために—
	11:45-12:30		昼食休憩
4	12:30-13:05	堂本佳樹	中学校英語科における「深い学び」の解釈とその実践
5	13:05-13:40	藪内里奈	高等学校英語科の授業における学びのユニバーサルデザインを用いた学習環境の構築
6	13:40-14:15	向井留衣	高等学校における論理の構成力を育むパラグラフライティングの授業実践

○休憩+総会準備(14:15~14:45)

○総 会(14:45~15:15) 共通講義棟 106 教室 (第3会場)

○特別講演(15:20~16:50) 共通講義棟 106 教室 (第3会場)

講師:大津由紀雄 先生(慶應義塾大学名誉教授)「日本型複言語主義教育の提唱」

○閉会行事(16:50~16:55) 共通講義棟 106 教室 (第3会場)

○懇親会(17:00~19:00) 食堂

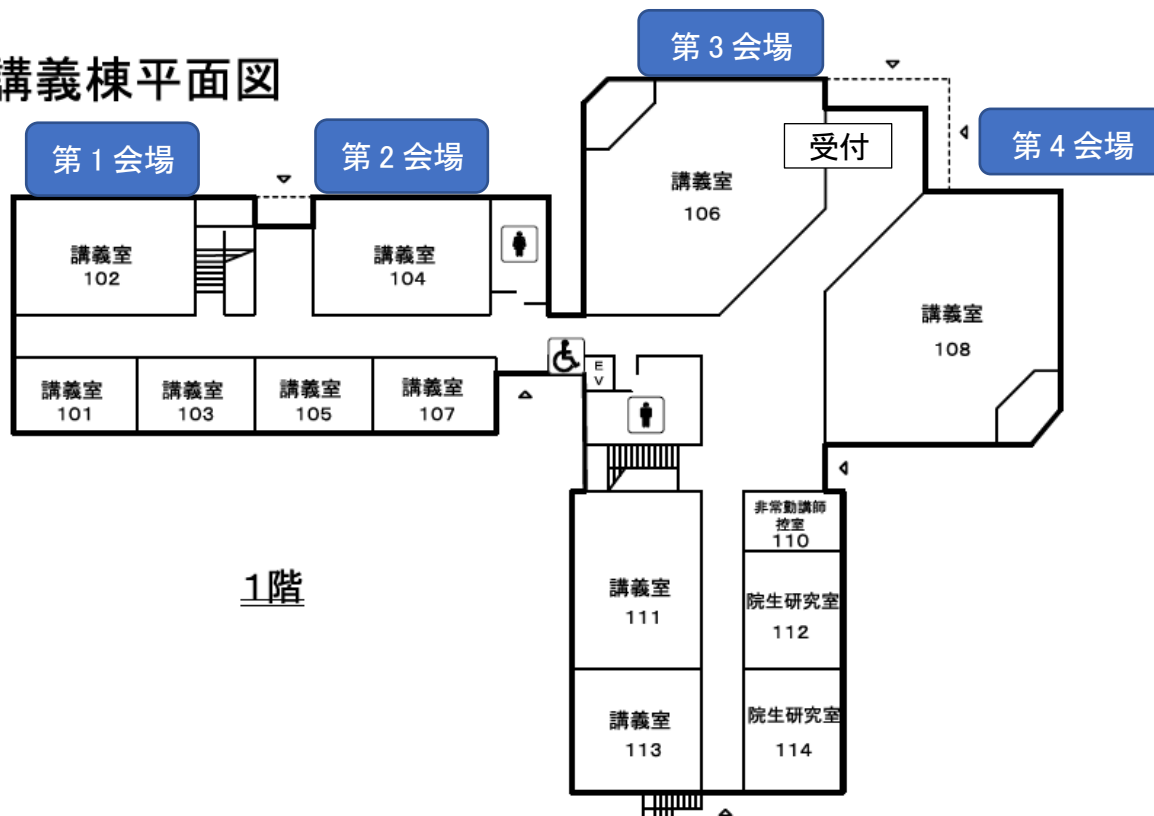
※発表者の方で当日発表資料がある場合は、指定されたアップロード先に電子ファイルをアップロードしてください。紙媒体の印刷は不要です。

※当日の発表資料置き場は以下の URL と QR コードです。

<https://www.dropbox.com/scl/fo/r83o72jdqw4dfhcx1a5x1/h?rlkey=5595rhirawewvujoyem18bpxem&dl=0>



共通講義棟平面図



○研究発表

第1会場 102 教室

言語感覚を働かせ、言語表現の効果を捉える説明的文章の学習

兵庫教育大学大学院言語系（国語）青木友彦

説明的文章の学習では、内容主義への批判を経て、形式的な技能を身に付けさせることを重視する傾向が見られる。しかし、説明的文章は筆者の見方・考え方によって捉えられた事象について、筆者の意図によって言語表現された文章と捉えることができ、その形式とはその文章特有のものであり言語感覚の表れでもある。したがって、むやみに形式だけを抽出し、活用して言語表現するのでは、言語表現の効果を真に理解し、自己の表現に活用しようとする能動的な姿には結びつかない。そこで、学習者の既習知識や生活経験等に裏打ちされた言語感覚を働かせて読むことに着目した。学習者の言語感覚を働かせて読むことは、筆者の創作の葛藤（論理的・修辭的表現の選択）を想定し、表現の選択を行った筆者の言語感覚を辿ることになると考えた。本研究は、学習者の言語感覚を働かせ、筆者の創作過程に働く言語感覚を辿る活動を通して、言語表現の効果を理解することを目指した実践研究である。

論理的読解力を育成する宣言的説明文の方略指導の開発—「確認読み」と「批判的読み」の関連性に着目して—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）嶋慎司

本研究の目的は、論理的読解力が育まれていく構造を明らかにし、その構造に基づいた宣言的説明文の方略指導を開発することである。論理的読解力を育成する上で、重要な視点が2点ある。1点目は、教材文から新しく得られた情報と習得した知識・経験等を様々な思考様式（「比較・類別」「順序」「原因・理由」「推論」等）を働かせながら関連付けて読むことである。2点目は、筆者の主張や論理展開に対して感じたことや気づいたことを増幅させる「批判的読み」を充実させることである。そのためには、教材文の内容を論理的に理解する「確認読み」が必要である。教材文には、筆者の主張に納得性と妥当性を生む「形式論理」があり、正確に把握しないと質の高い「批判的読み」にはつながらない。

本発表では、「批判的読み」の経験がほとんどない小学校4年生の児童を対象に、論理的に理解することを目指した「確認読み」が「批判的読み」の充実にどのように関連付いたかを考察し、報告する。

文章論に基づく文学教材の授業づくりー芥川龍之介『トロッコ』の場合ー

兵庫教育大学大学院言語系（国語）新川梨奈

芥川龍之介『トロッコ』は長年、教科書に掲載されている教材である。先行研究によると、本教材の特徴として、主人公である八歳の良平の心情を情景とともに巧みな描写で表現していることが挙げられる。しかし、描写について学習することに最適な教材であるにもかかわらず、描写を中心に扱った授業実践は十分ではない。内容面の読解が重視されることから、描写は発展学習となることが多い。また、授業で描写を扱う際には授業者が一方向的な説明、解説をする授業になってしまう懸念がある。

本実践は中学1年生を対象とし、情景描写と心情描写に着目させ、双方の関係性に気付かせることをねらいとした。一読総合法の要素も取り入れ、毎時間の授業で順次当該場面を提示した。また、文章論の「謎解き型」の授業方法を採用し、生徒に問いを考えさせ、クラス全体で1つに絞った問いの解決を、描写に基づく読みによって解決をはかる学習活動を取り入れた。本実践の効果について単元の前後におこなったアンケートを分析し、考察する。

日本語発音指導における「相互評価」に関する分析

華南師範大学大学院 日本語言語文化専門（兵庫教育大学交換留学生）曹若蕎

発音指導は日本語教育の重要な一部である。中国人日本語初級学習者（N5以下）に焦点を当てた本研究では、シャドーイングと相互評価を中心に行われた。本稿は指導プロセスの中で収集された相互評価データを分析し、本調査における発音問題点の種類と相互評価の特徴をまとめ、日本語の発音指導に示唆を得ることを目的とする。

本調査は3ヶ月にわたり、講義の一環として12名の研究協力者が授業後シャドーイングと相互評価をさせ、週に一回の頻度で音声と相互評価のデータを収集した。研究結果から、学習者は有気音と無気音の区別が難しく、濁音の発音誤りが多く見られ、また特殊拍の発音誤りはほとんど特殊拍長（特殊拍の持続時間）の誤りであることが分かった。相互評価の特徴として、評価者は積極的なコメントを多く残し、消極的なコメントを婉曲的な言い方に言い換えることが見られる。また、一部の評価者に問題点を明晰に表現しなかった現象も見受けられ、相互評価の事前指導の必要性が示唆される。

第二言語学習者を対象とした日本語学習の研究—アニメ「ちべたぐらし・あひるの生活」の活用を中心に—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）LI ZIXUAN

日本語の学習には、話す・聞く・書く・読むの四つの領域がある。その中で「話す」が比較的上達しにくい。

話の内容を聞いてわかって、文章を見て読めて、考えて書けるとしても、自分の言いたいことを頭の中で整理し、すぐに話せるとは限らない。

本発表の目的は、アニメテキストを活用して、日本語学習者の学習への抵抗感を軽減し、学習者がアニメの内容を話し合っていく中で、話す能力が向上する学習方法を開発することにある。具体的には、アニメテキストを活用した授業で、日本語の移行の文を作らせる授業内容を開発した。

授業の効果としては、以下の点が挙げられる：

- ①アニメキャラの性格が個性的で内容が面白く、生徒の授業への集中力を保たせることができる。
- ②アニメのキャラを利用して練習したり、身の回りの物で似ている事柄を思い出し、それらの共通点と相違点を考えて「移行文」を作り、繰り返し練習をすることで、生活上よく使用する文法を勉強することができる。

第2会場 104教室

話型を中心とするメタ言語の活用に関する学習プログラムの構築

兵庫教育大学大学院言語系（国語）大浦正子

本発表の目的は、話型を含むメタ言語の導入と活用について、系統的・計画的指導の観点から、思考の言語化を支援するための学習プログラムを構築することにある。話型は、メタ言語としての機能に焦点が当てられることは少なく、従来、単なる言語技術の一つとされ、話すための型としての意味合いが強かった。その一方、近年、論理的思考の向上を図るための一つの思考ツールとして位置づける見解が示されるようになった。

本発表では、話型の援用による論理的思考力の向上という観点から、話型に関する現状の問題点を批判的に検討し、既存の話型を系統的に整理しつつ、(1)どのような目的でどのような話型を用いるか、(2)どのようにして話型を使えるようにするか、(3)話型によって何が出来るか、(4)どのような限界が想定されるかを明らかにする。その上で、(1)～(4)の4つの観点から学校現場で学習プログラムを構築し、現段階のものを提示する。

音声入力アプリを活用した「書くこと」の実践研究-意見文執筆指導を題材として-

兵庫教育大学大学院言語系（国語）鶴谷拓真

世の中のデジタルシフトが加速する中、学校現場も一人一台端末の普及により、書くことの学習指導においてもデジタルシフトに対応した学習指導がこれまで以上に求められることが予想される。本発表の目的は、書くことに課題がある学習者に対して、意見文執筆の支援の方法を提案することである。その際、「音声入力アプリの活用」・「打ち文字の活用」・「意見文のスキーマの提示」を柱とする。書くことに課題のある学習者には、筆記という活動に苦手意識を持っている者や、文章構成について苦手意識を持っている者等実に様々である。

本研究では「音声入力アプリを用いた意見文執筆指導」を導出するための対照実践を示す。修正版 GTA による分析の結果、音声入力アプリを活用した際、聞き手（読み手）とのやりとりにより思考が深まり、一人では言語化できなかった多くの考えが短時間で文字化できることがわかった。また、筆記による執筆時と比較し、より深まり根拠に基づいた意見を生成することが期待できる。

中学校国語科における「読むこと」の可能性—視覚情報の言語化に焦点を当てた学習指導—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）藤井雅

本発表の目的は、メディアを「読むこと」の学習の中で活用し、得た視覚情報を言語化する活動が学習者の言語能力にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。

現在の学習指導要領では、中学校国語科で「読む」対象に当たるものとして活字文章が大きな割合を占めている。実際の学習者は活字文章以外に多様なメディアを使い生活しているが、これらのメディアは学習の場には持ち込まれないことが多く、学習者の日常生活と学習の場が乖離し始めている。学習者一人一人が端末を持ち様々なメディアに触れている中、活字文章だけではない「読むこと」の学習が必要だと考える。

そこで生徒にとって身近な楽曲のミュージックビデオや歌詞を用いて、視覚から読み取った内容をどの程度言語化できるのか検証を行った。その結果、全体の9割の生徒は感想や意見は述べられること、そのうち7割の生徒が根拠を挙げて説明することに課題があることが明らかになった。発表当日はこれらの課題を解消するために検討したことを報告する。

伝記教材から読み解く小学校国語教科書の歴史的背景の一考察—福沢諭吉・田中正造を手がかりとして—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）金川麻奈未

小学校国語教科書において伝記教材は戦後以降途切れることなく採録され続けている。学習者に生き方の規範を示すという伝記教材の学習価値が認められていることから、時代の移り変わりにより採録される被伝者やその語られ方は変化しながら現在に至っている。戦後以降、小学校国語教科書において採録数が最も多い人物である福沢諭吉がその一例である。昭和24年度から圧倒的な採録数で伝記教材の代表的な被伝者であったものの、昭和54年度以降再び姿を現すことはなくなった。それに置き変わるように採録数を伸ばした人物が田中正造である。近代化を推し進めた社会状況の方向転換が伝記教材の採録にも大きく関わったと言える。これを踏まえ、被伝者が福沢諭吉から田中正造に置き変わった教科書を対象として、他教材はどのように変化したのか伝記教材を手がかりとして検討することを目的とする。当日の発表では、各項目別に特に顕著に変化が見られたものについて考察する。

小集団で探究的に話し合う力を育てる学習指導の検討

兵庫教育大学大学院言語系（国語）鹿内恵美

言語活動の充実が求められ、話し合い活動を取り入れた授業が積極的になされるようになった。一方で、特別な指導がなされないまま生徒にまかせっぱなし、やらせっぱなしになっているという課題も見られる。実態調査からも、学校での話し合い指導は述べられたものについての検討を行うというより、自分の意見を述べることが重視されていることが指摘されており、指導する側が目指すべき話し合いのモデルを念頭に置く必要がある。

そこで本研究では、Neil Mercer の「探究的会話 (Exploratory talk) 」を目指すべき話し合いのモデルとして設定した。「探究的会話」で見られる発話カテゴリである「自説と関連付ける」「新たな視点の提出」を取り立てて指導することで、話し合いが探究的になると仮説を立て、単元計画の構想および実践を行った。当日は、実践を通して検討したことを発表する。

第3会場 106 教室

「ボーカロイド曲」を用いた漢字・語彙指導—興味関心に着目した授業に関する一考察—

兵庫教育大学大学院言語系 (国語) 宮本竜成

本研究の目的は、漢字・語彙指導においてサブカルチャー教材の活用方法とその効果を明らかにすることにある。学校現場の漢字・語彙指導においては、主に家庭学習として漢字ドリルを課し、定められた範囲内かつ定期的な予告型のテストが実施されている。新出漢字のみの扱いとなるため発展的ではなく、受動的な学習方法である。また、学習者によっては苦手意識が強く、興味関心を持つことが困難であることが問題視されている。

これらを克服するため、本研究の指導過程では、数多くあるサブカルチャー教材の中から「ボーカロイド曲」の歌詞に着目し、授業を展開した。発表当日は、学習者が日常的に楽しんでいる「音楽の歌詞に着目した漢字・語彙指導」の実践と、アンケートの分析結果について報告する。

高等学校国語科における思考ツールによる論理的思考の支援に関する事例研究

兵庫教育大学大学院言語系 (国語) 篠倉利典

本発表の目的は、高等学校の国語科授業において、思考ツールの活用により論理的思考力の向上を図ろうとするものである。その際、発想の誕生や発想の展開において、どのような文脈や条件の中でどのような契機によって作用したかを自覚的に説明できるようにするため、フィンランド教育で知られている「カルタ」をアレンジしたものを援用した。

具体的には、二つの実践事例を取り上げる。第一は、古典学習において、「桜」を刺激語として反応語を連想するように求め、その反応語から連想させる二次的な反応語を整理し、刺激語から反応語がどのように連想されたかを説明させる実践を行った。もう一つは、古典の解釈に帰納法を用いる試みであり、「春はあけぼの」を理解するのに「○○は□□」というパタンを表現をできるだけ多く現代日本語で提示し、そのスキーマ的な意味を理解することで「春はあけぼの」の理解を目指すものである。これらの実践を通して、国語科の授業における論理的思考力向上のための学習プログラムの有効性を検討する。

語り手に着目して〈再読〉することで、児童の読みを再構築する授業実践の可能性—小学校高学年の文学作品を中心に—

兵庫教育大学大学院言語系 (国語) 尼子泰裕

国語科における文学作品の授業では、同じ作品を何度も読み返すこと、つまり再読することを通常の状態としているが、そのことはあまり意識されていない。また、いわゆる三読法 (第一次: 初読、第二次: 精読、第三次: まとめ・発展) の学習では、第二次: 精読でたどり着いた読み (解釈) が正解のようになり、子どもたちは「他の読みはできないのか」という視点をもちにくい。そこで、田近洵一氏による初読と再読に関する定義や提言を踏まえ、語り手に着目して〈再読〉するという方法を提案する。再読に着目した先行研究の多くは、時間をあけて読み直す仕方で行われているが、

本研究の〈再読〉では時間をあける代わりに読む視点を変えることで読みの変化や深化を促すことを目指している。それは、新しい正解を提示するというのではなく、読みは再構築される可能性をもつことを児童が認識することである。「ごんぎつね」（4年）「大造じいさんとガン」（5年）「やまなし」（6年）の三作品で〈再読〉の授業を構想・実践したものを発表する。

古典文学研究と古典教育を架橋するための授業実践を考える—中学校 3 年生の和歌教材「玉の緒よ」歌を中心に—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）日置志歩美

本研究は、古典文学研究と古典教育とを架橋するための実践方法について考察することを目的とする。これまでの各種調査において、古典に否定的な回答をした生徒は多数いた。「古典嫌い」を減らすためには、内容的魅力を発見してきた古典文学研究の成果を古典教育に活用し、生徒の興味関心を引き好奇心を喚起する授業実践を行うことが必要である。

実践においては、ジェンダーの視点からの読みを取り入れることで、現代的な課題を解決する授業について考えたい。ジェンダーの問題は国際的なものであるが、日本では多くの課題がある。この課題を解決するために、国語科では「言葉」を通して見方・考え方を働かせ、社会的特権や固定概念を問い直すことが重要だと考える。その中で、古典文学作品は今を生きる生徒との時間的な隔たりがあり、心理的ダメージを受けにくいと考えられる。今回は男性の立場から詠まれた式子内親王（後白河天皇の第3皇女）の「玉の緒よ」という和歌を中心にした授業実践を提案するとともに、実践を通して検討したことを報告する。

『大鏡』における歴史的敗者の語られ方—伊周を対象に—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）西村樹

平安時代成立の歴史物語である『大鏡』では、藤原氏を中心とする様々な人物が語られている。この作品は道長がいかにして権勢を手にしたかを語る過程で歴史を明らかにしていくという姿勢で語られており、その中では、藤原氏と争って敗れたもの、藤原氏内部での権力争いによって地位を追われたものなどもまた語られている。そういった人物の中に藤原伊周は位置している。伊周は道長と同時代に生き権力争いを行った人物であり、長徳の変によって地位を追われた人物である。『大鏡』における伊周の登場する章段は特徴的なものが多く、これまでもその史実性などについて多く論じられてきているが、伊周の人物像そのものについてはあまり論じられていない。

本発表ではこれまで十分に見出されてこなかった伊周像、その描かれ方の固有性を明らかにすることで、『大鏡』の歴史物語としての方法の一側面を浮かびあがらせていきたい。

第4会場 108 教室

英語の歌を活用した英語発音指導—リズムに焦点をあてて—

兵庫教育大学大学院言語系（英語）藤岡里英

英語教育において発音を指導することは欠かせないが、その中でもリズムなどのプロソディを指導することは重要であると言われている。そこで本研究の目的は、英語の歌を使用した帯活動を通して身につけた英語のリズムを、音読などの音声産出に応用することができるのかについて明らかにすることである。この目的のもとで英語の歌を3曲使用し、①音の連結 ②不要母音の挿入 ③強弱と尺の長短 の3項目について、全13回の帯活動で指導を行った。研究対象は公立中学校1年の

2クラスの生徒である。指導の前後に音声録音を行い、どのような効果が音声面に表れたかループリックを用いて評価を行った。また、各回の指導後にはふり返しを行い、全指導後には事後アンケートを実施した。その結果、音声面においては、個人差はあるものの多少の伸びを確認することができた。さらに、各授業後のふり返しや事後アンケートでは、英語の歌を活用した実践に肯定的な回答が見受けられた。

外国語学習において児童の動機づけを高めることを目指した協同学習の実践研究

兵庫教育大学大学院言語系（英語）上村こずえ

学力調査の結果より、小学6年生の3割以上の児童が外国語の学習に対して否定的な感情を抱いていることがわかった。本研究では、小学校外国語教育において、児童の動機づけを高めることを目指し、協同学習を取り入れることの効果を明らかにすることを目的とする。今回は5年生3クラス100名の児童を対象に、約6週間で45分間授業を12回ずつ行った。授業デザインするにあたって、自己決定理論を理論的基盤とし、それに関わる3欲求の充足を図るために協同学習を取り入れた。調査方法として、事前と事後に児童の外国語学習に対する意識を尋ねるアンケートを4件法で実施した。また、記述式の児童のふり返りの分析や授業活動の録音、録画の分析を行った。量的研究においては動機づけに一定の効果が確認されたが、談話分析やふり返しなど、個人の様子に着目すると、環境によっては効果が見られなかった事例も明らかとなった。これらを丁寧に分析することによって、今後の授業改善の視点とする。

中学1年生を対象とした明示的な読み書き指導の研究—デコーディング・スキルの獲得のために—

兵庫教育大学大学院言語系（英語）藤田理瑚

本研究の目的は、中学1年生の英語の授業で、シンセティック・フォニックス(以後フォニックス)の指導を実践し、その効果を検証することである。

先行研究から、英語の読み書きでは、音韻認識能力を高め、音と文字の対応を学ぶことが重要であることが示されている(Robert, 2021など)。このスキルの獲得を支援するものがフォニックスである。

研究方法は、令和5年5～6月に、県内の公立中学校(A中学校)の1年生(N=48)を対象に、15分間のフォニックス指導を行った。指導の効果を検証するために、アルファベットの名称の読み・書き、アルファベットの音の読み・書き、単語(無意味語含む)の読み・書き、短い英文の音読(事後テストのみ)を課題とする事前・事後テストを実施した。

その結果、事前・事後テストうち、名称書き以外のテスト項目について統計的に有意な差があり、指導の効果が見られた。発表では、生徒毎の変動など、質的な側面についても言及する。

中学校英語科における「深い学び」の解釈とその実践

三田市立けやき台中学校 堂本佳樹

本発表は、2020年から全面施行された新学習指導要領でうたわれている、「主体的で対話的で深い学び」について、発表者が中学校英語科の指導・支援の中で、どのように具現化を試みたかを示したものである。特に「深い学び」の指導・支援について検討する際に参考にしたのが、国際バカロレア教育が推進している「概念教育」である。単元構想や授業計画に「概念教育」の考え方を取り入れたことで、従来の授業と比較して、授業内で行う表現活動の内容や、生徒の表現内容・学びに変化が見られた。中学校英語科での「深い学び」を通して、他の学習や文脈で活かせる汎用的

な資質能力を生徒につけさせることの利点や課題を提示したい。

高等学校英語科の授業における学びのユニバーサルデザインを用いた学習環境の構築

兵庫教育大学大学院言語系（英語） 藪内里奈

「令和の日本型学校教育」の答申では自立した学習者を育成することや協働的な学びを充実させることを求めている。その実現のためには、学びのユニバーサルデザイン（UDL）が有効であると考えられる。UDLとは、学習上の障壁を意図せず作ってしまうものに対処するための枠組みのことであり、ガイドラインによって段階的支援の重要性を強調している。しかし、日本でのUDLに関する授業実践や研究は十分ではない。

そこで、本研究では高校1年生の英語コミュニケーション受講者を対象とし、UDLのガイドラインの目標である「目的を持ち、やる気がある」学習者になるための支援を実習校の生徒の実態や生徒の声を踏まえて行なった。実習校の実態として授業で使うワークの予習をしてこない生徒が多かったため、補助プリントを配布して予習しやすい環境を整えた。その結果、これからも予習に積極的に取り組みたい生徒や今後も自主的に英語を学んでいきたい生徒が多く見られた。

高等学校における論理の構成力を育むパラグラフライティングの授業実践

兵庫教育大学大学院言語系（英語） 向井留衣

本研究は、「読み手に分かりやすい文章を構成する力」「分かりやすく論理的に文章を書く力」を育むことを目的に、高等学校で明示的に英語パラグラフの特徴を伝える授業を行った際、生徒の書く文章にどのような違いが起こるのかを明らかにした。授業実践を行う前に、生徒の文章を分析したところ、生徒によって習熟度が大きく異なることが分かった。授業では上山(2020)を参考に、主に意見文を作成する過程において、話し合い活動を通してブレインストーミングを行い、その内容を参考に50-100語程度のパラグラフライティングを繰り返し行った。授業を通して、より詳細で論理的な文章を書くことができるようになった生徒がいた一方、アイデア出しの過程や、日本語で考えたことを英語の文章としてまとめる過程で難しさを感じる生徒がいた。明示的な指導は、知識・技能面で一部の生徒に効果があったと言える一方、個々の困難さを解消するための工夫が必要であると考えている。

○特別講演

日本型複言語主義教育の提唱

大津由紀雄先生（慶應義塾大学名誉教授）

欧州由来のCEFR（外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠）がいくつかの経路を経て日本にも紹介され、さまざまな形で言語教育に影響を与えています。しかし、一方では、その基盤にある複言語主義についての理解が極めて浅薄で、ごく表面的にCEFRの評価指標を利用するというケースが稀ではありません。他方では、欧州における言語政策としての複言語主義の検討は行われているものの、個の中における複数の言語を関連づける原理が明確にされておらず、複言語主義に基づく言語教育の姿が鮮明に描けていないケースも見受けられます。

この講演では、複言語主義とはなにかをできるだけ分析的に明らかにした後、その考えを日本での教育に活かす方法について論じたいと思います。